高校中途退学者による職業の選び方
― キャリア形成における「不器用さ」をめぐって ―

三代　陽介

1．中退者の職業選択とは

若者が大人になるための過程においては様々な課題を乗り越えていく必要がある。なかでも職業選択は中心的課題であり、若者自立・挑戦プラン（2003）以降、特に注目され実態の解明と対応が求められている。しかし、現在においても支援の網が受けられない代表的な存在が高校中途退学者（以下、中退者）である。2020 年の学校基本調査によれば高校への進学率は 98.8% と高卒資格が標準的になった現在では、中退者が将来へのキャリア[1)]形成に大きな困難をもたらすと考えられるようになった。では、中退者は職業への移行においてどのような課題を抱えているのだろうか。これまで、日本では高校中退の問題は、学校教育のなかでの問題とされてきた。そのため、中退後の若者がどのように職業移行を果たすのかという点については関心が持たれてこなかった。だが、21 世紀に入ると、中退者の職業移行にも関心が持たれるようになった。背景には、若者の就労条件が悪化し、非正規雇用の若者の存在が問題化したことにある。なかでも中退者は、非正規雇用の要因の一つとして注目されるようになった。そのようななか、若者の非正規雇用に対する新たな議論として登場するのが、不器用な人は解雇されても仕方ないのかという問題である。例えば、非正規労働者の側に立って労働運動を行っている河添誠（2008）は、何度も解雇に遭遇している非正規雇用の若者のなかに、どうしようもなく不器用な人々が含まれていると指摘している。さらに、本田（2009）の本では不器用をめぐって、ひとつの論争が紹介されている。教育者である本田としては不器用を克服する職業教育の必要性を訴えており、不器用さはマイナス面だけだと考えられている。だが、筆者は不器用という言葉にも、マイナスの意味以外のかすかな肯定の響きが含まれているのではないかと考えている。

筆者がこれまで出会ってきた中退した子どものたちのその後の進路を見ると、彼らの生き方には不器用という言葉がぴったりと当てはまる。多くの中退者は、高校教育から仕事への移行支援の機能が受けられず、社会とつながりにくい立場であると考えられる。では、中退者はどのようなフォローを受け徐々に就業への適応をするようになるのか。そこで、本論文では、通常のキャリアから、外れた中退者はどのように職業を選択し適応していくのか、またそのための条件とは何かを明らかするために中退者のライフヒストリー分析により中退前後の体験や他者との関りを調査した。

調査結果からは、就労に至る過程において一般的に就労支援と位置づけられる内容とは異なった課題があることや、就労に対して仲間からの信頼を築く重要性が明らかとなった。これまでは、高校中退や正社員に馴染めない不器用さはマイナスと考えられてきたものの、中退者を支える仲間の間では何らマイナスの要因になっておらず、コミュニティの中で生きていく上ではむしろプラスになることさえもある。コミュニティできちんと生きていく不器用さは職場というアソシエーションへの適応を高める職業教育（キャリア教育）の限界を示しているのではないかと考えられる。

2．若者の就労を巡る既存研究の整理と本稿の研究課題

2-1　若年者雇用の状況と慣行的就労支援

若年者雇用の実態を把握する手がかりとして、若年者雇用実態調査（厚生労働省：2018）[2] がある。調査結果によると、若年労働者が就業している事業所割合は 76.0％であり、内訳は「若年正社員がいる」事業所が 63.9％、「正社員以外の若年労働者がいる」事業所が 38.1％である。「若年正社員がいる」事業所割合を産業別にみると、電気、ガス水道業等（86.8％）が高く、次いで金融・保険業（86.1％）とある。「正社員以外の若年労働者がいる」事業所の割合は、宿泊飲食業（70.5％）が最も高く、教育学習支援業（55.6％）が低い割合となる。正社員の割合を高めるためにも半数以上（53.4％）の事業所が非正規雇用者を正社員へ転換させる制度を実施している。だが、一方では離職状況は高く、2017 年 10 月～ 2018 年 9 月の期間に若年労働者がいた事業所のうち、自己都合により退職した若年労働者がいた事業所は 44.9％に及ぶ。雇用形態別（複数回答）でみると、若年正社員（28.7％）、正社員以外の若年労働者（21.8％）と正社員の離職の方が高い傾向にあった [3]。また、初めて勤務した会社での勤続期間別にみると、1 年未満の期間では「人間関係がよくなかった」と回答した割合が最も高く対人スキルに起因するものが主たる課題となっている [4]。

若年者雇用実態調査では、若者全体の就労に関する概要を把握できるが、調査対象年齢が 15 ～ 34 歳の労働者と幅広い。中退直後の就労状況の手がかりとして厚生労働省人材開発統括官が示した、『若年者雇用対策の現状等について [5]』が参考となる。調査結果からは高校を中退した直後の就業状況は、アルバイト・パート（69.6％）、無職で何もしていない（4.3％）という結果からも、中退直後に正規雇用となることは難しく就労への移行には課題が見られる。

一方、高校新規学卒者に対しては手厚い就職支援や慣行により職業選択をサポートしてきた。堀（2013）は 90 年代初めまで、新規学卒者といえば高卒就職者であったと位置付けた上で、90 年代半ば以降、高校就職には量と質の面で劇的な変化が生じたと述べる。その上で、90 年代までの組織化された就職指導（慣行）についての特徴について 3 点を示している（表 1）。しかし、これら独自の就職システムにはメリットとデメリットもある（表 2）。2000 年代前半には、一人一社制から複数の応募が可能としたが、実務では「これまでの企業との関係性を大事にしたい」や、「大学生と違い高校生は複数企業を掛け持ちできるほど精神的に成熟していない」という意見がみられ、一人一社制の原則を続けている（堀 2013：28）。このような就職システムは高校側には大きな利点もある。「まじめな学校生活＝安定した就職」を生徒らに明示化することで、卒業時の就労を意識させた安定的な高校生活を過ごさせることが期待できるからである。

これまで日本社会では、若者の円滑な移行を支えてきたのは、企業、学校、行政が関与した新卒一括採用の働きが大きい。企業や官公庁は、高校の卒業時期に合わせ、事務系・技術系と大括りの職種区分での一括採用を行い、定年までの長期の雇用を想定した日本型雇用の入口としてきた。しかし、このような新卒就職構造が揺らいだ背景として小杉（2017：31）は、1990 年代初めの大規模な経済後退期にあるとして次のように述べる。「企業の新卒採用数は大幅に絞られ、ここから 2000 年代初めまで日本の若年失業率は上昇を続けることになる。また、若年非正規雇用者が急増したのもこの間である」と分析した。その上で、新卒就職システムの様々な見直しはあったが、学校在学中に就職先を決めて卒業と同時に正社員になるという慣行は現在も強固に存在すると指摘している。

だが、直近である総務省労働力調査（2021）によると、若年無業者（15 ～ 39 歳）の数は 87 万人（2.7%）に及び、若者と職業のミスマッチは見逃すことが出来なくなっている[6)]。こうした悪化した労働環境を生きる若者に必要な能力とはどういったものなのだろうか。そこで教育面での対策で用いられるようになったのがキャリア教育という考え方である。

表 1　組織化された就職指導・慣行（90 年代まで）

1	高校生は大学生のように各自が直接企業に接触せず、学校を通じて行う。
2	高校生の就職試験の解禁は 9 月 16 日とする。大学生の就職協定とは異なり遵守される。
3	一人一社制の取り決めがあり、複数の企業を掛け持ち受験できない。

出典：堀（2013：25-26）より作表

表 2　日本的な高卒就職構造の効果と課題

生徒	○	大学生のような一般市場での競争にさらされず、正社員の仕事を得ることができる。
	▲	成績で校内選抜されるため、希望企業を受験できないことも。併願受験できず一人一社の原則。
高校	○	大勢の就職者を短期的に安定した仕事に就かせることができる。
	▲	高校により求人に偏りがあるので、就職名門校以外の高校からの就職は不利になりがち。
企業	○	安定した新卒採用が期待できる。
	▲	企業が望む人材を高校が送る保証はない。企業独自の選考が行いにくい。

出典：堀（2013：27）より転記
＊○▲は筆者加筆箇所

2-2　就労支援におけるキャリア政策

直近である 2021 年版の子供・若者白書（内閣府）では、「若年無業者やひきこもりなど若者の自立をめぐる問題の深刻化や、少年による重大事件、有害情報の氾濫など、子供や若者をめぐる状況は厳しい」と位置づけ、諸課題への対応が示された（内閣府 2021：1）。特に、若者の職業的自立、就労等支援は一つの項が設けられ各学校段階を通じて、社会的・職業的自立に必要とされる能力や態度を育てるキャリア教育に取り組み、学校以外でも職業能力開発の機会の充実を図る重要性を示した（前掲：73-74）。キャリア教育推進の背景に非正規雇用率の高さや、雇用のミスマッチ、若年無業者の存在など学校から社会や職業への移行が円滑に行われていないことが課題とされた。

だが、本論の対象である高校中退者に対しては、「中退事由としては、学校生活・学業不適応、進路変更が多く見られる」との指摘に留まっており細かな言及は見られず、中退者＝困難を抱える若者と位置づけられ、関係機関の連携を提唱するに留まっている（前掲：103-104）。ところが、高校中退という出来事は本人の抱える問題だけではなく、青年期から成人期へのスムーズな移行を阻害し、労働市場から除外されるだけでなく社会関係の形成や階層移動すらも困難にする危険性をも含んでいる。また、近年では貧困の世代間連鎖の潜在的要因になるとも考えられるようになってきた。

例えば教育社会学者の片山悠樹（2018）は、これまで中退者の退学後に対する研究よりも主には退学前の研究が大半を占めていたと整理した上で、若年層の職業移行が不透明になるなか、中退者の退学後の状況に関心が寄せられ不安定な移行が指摘されるようになったと分析した。併せて、フリー

ターやニートの支援現場のなかで、移行リスクを抱えやすい層＝中退者の存在が再認識され、中退前から中退後へと中退研究の焦点の移り変わりが生じてきたと位置づけた。すなわち不安定な就業、貧困や希望喪失など中退者の抱えるリスクが指摘されるなかで、若年層の直面するリスクを最も抱えやすい存在こそ中退者であるといった認識が広がりを見せたのである。

このような若年層の抱える課題を検討するためにJILPTと日本学術会議は、「若者問題への接近」とテーマを設け労働政策フォーラムを共催してきた。「若者支援とキャリア形成 ― 課題を抱えた層へのアプローチ ―」（2011）特集[7]では、若者へのキャリア形成の必要性を示しながらも、高校中退者がいかなる支援を必要とするのかを検討するには中退者が退学後どのような軌跡を歩むのかを確認する必要があることを主張し、若者支援におけるキャリア形成の重要性を示した。

では、どういった経緯で教育現場にキャリアという言葉が用いられるようになったのであろうか。キャリア教育という言葉が、文部科学行政関連の審議会報告等で初めて登場したのは、1990年12月の中央教育審議会答申「初等中等教育と高等教育との接続の改善について」であるとし、それ以前にも90年代前半からすでに、勤労体験学習総合推進事業や中学校進路指導総合改善事業など、現在のキャリア教育につながる内容の事業を開始していたものの、これらの理念や試みは90年代末以降のキャリア教育という言葉に集約されるようになった（本田：2009）。その後の政策展開でも「若者自立・挑戦プラン（2003）」や「若者の自立・挑戦のためのアクションプラン（2004）」の中心的な構成要素としてキャリア教育の推進と充実が掲げられた。だが、増大する不安定雇用や失業を繰り返し、非労働力化する若者が目立つなか、階層化された労働市場において職業への移行がスムーズに行えているとは言い難い。

たとえば、東京都下調査（第二回若者のワークスタイル調査）に対し小杉（2007）は、非典型一貫（離学後、ずっと非正規）は高卒、中退者に多く（男性で4割前後、女性で7割前後を占める）、大学や高専等の卒業生では正社員定着率の方が高いことを指摘した（表3）[8]。その上で、「この差異の程度は、性別の違いより大きく、職業キャリアは学歴で大きく異なることがわかる」と位置づけた（小杉2007：62）。また、非典型一貫キャリアの増大の原因の一つとして、「大卒者に対しては学卒直後の正社員就職を増やし、またその定着を促していると考えられるが、高卒や中退者に対して正社員採用は拡大していないし、また、非正社員から正社員への移動も広がっていず、結果として『非典型一貫』キャリアが増えているのではないか」と分析している（小杉2007：65）。

表3　キャリア類型の分布（性・学歴別）

【男性】	高卒	専門卒	短大高専卒	大学院卒	中卒高校中退	高等教育中退	学歴計(平均)
正社員定着率(%)	21.3	33.2	39.1	53.0	5.3	9.8	30.4
離学後､ずっと非正規(%)	34.1	22.3	26.1	14.1	40.0	45.9	27.5
N(人)	381	193	23	283	95	61	1038
【女性】	高卒	専門卒	短大高専卒	大学院卒	中卒高校中退	高等教育中退	学歴計(平均)
正社員定着率(%)	19.1	29.6	39.8	49.5	0.0	0.0	29.3
離学後､ずっと非正規(%)	51.1	26.1	19.9	22.1	72.5	58.5	36.4
N(人)	282	199	161	208	69	41	962

出典：堀編（2007：63）より作表

このような小杉の研究がもたらした論点は若者の非正規雇用は学歴で説明可能かという点にある。これに対してもうひとつ新たな議論として浮上したものが、不器用さを許容しない社会の登場である。これらは若者のキャリア形成に即して提起された、キャリア形成における不器用という問題である（本田：2009）。本田は、かつて高卒者の多くは正社員になり不器用ながらも適応可能な職場があるために問題は顕在化しなかったと考えている。しかし、雇用環境全体が悪化して、不器用では生きられない社会が生み出され、学歴差に加えて器用や不器用という格差が非正規労働の要因になり始めていると新たな主張をしている。そこで次節では、キャリア形成を巡る不器用さについて整理をする。

2-3　キャリア形成における不器用という問題

近年、日本社会では若年者を取り巻く社会環境は大きな変化を見せている。特に、就労を巡る格差社会への誘因や貧困の深刻化があるなか、若年労働市場では、正規雇用、非正規雇用いずれも労働により生活を成り立たせることが困難になりつつある。そのような状況下、貧困問題や社会運動に関わる立場から社会への抵抗を訴える議論が見られるようになった。例えば『「いきづらさ」の臨界―“溜め”のある社会へ』（湯浅・河添編 2008）では、何度も解雇に遭遇する非正規雇用者には、どうしようもない不器用な人がいるとし、職場のトラブルに遭遇したとき、「抵抗」できる能力が必要であると訴えている。具体的には、労働者の権利として、雇用契約書の読み方や社会保険、雇用保険の知識などである。また雇用に関わる違法な扱いがあったとき、どう問題解決に向かうのかについて解雇されながらでも生きていく「抵抗」する力が必要であると訴えた。河添は不器用さを人間関係の作り方が極端に下手で、コミュニケーションが苦手な空気の読めない人とイメージしている。このような不器用さの問題は、出身家庭の階層や親子関係、成長過程での様々な経験が反映されており、世代間連鎖の問題もあると位置づけた。

では、大半の人間が備え持つ、あるいは不可避的に生み出された不器用さについてはどのように対応すればよいのだろうか。これに対して、本田は河添の不器用さを固定的で不変のものと捉えることに対しては違和感が残ると指摘し、器用さへ接近しうる社会的な環境整備が必要だと述べた。その上で環境や経験により人間は変化し得ると訴え、不器用な者でもある特定の領域で発揮できる力＝部分的な器用さを身につけられる環境や経験が重要であると示した。本田は特定の領域で発揮できる力は学校における職業教育によって身につくと考えている。また、部分的な器用さを専門性と位置づけ、専門性によって不器用さをカバーしながら、気がついてみると器用さも身につけ職場への「適応」が可能となっていくと主張した（図 1）。

「適応」と「抵抗」については本田の『教育の職業的意義―若者、学校、社会をつなぐ―』（2009）でも言及している。本田は若年層の雇用の不安定状況を示し、それらの不安定状況が生じた原因を、職業教育の訓練供給元である高校と、企業の分業体制の機能不全を問題視した。従来のように企業が教育訓練を提供、実施しなくなったため、学校教育がその役割を担うべきであると主張した。また、諸外国とデータ比較をして日本の教育に職業的意義が低いことを指摘し、現代日本の雇用が抱える問題を改善する方法として教育の職業的意義を高めることが必要だと考えている。これまで学校教育が若者を仕事へ「適応」させるために有効な機能を果たしてきた一方で、雇用関係で権利が侵されたときに「抵抗」する力や柔軟な専門性を身につけさせる機会が十分でなかったとことを危惧している。本田は、「適応」と「抵抗」を両輪とし、社会へ個人を準備させた上で輩出すべきであると考えてい

る。しかし、実際にはそのような機関は手薄であるため学校教育がそのような機能を拡充することが求められると教育の職業的意義を訴えている。だが、本田の職業教育によるキャリア形成の不器用さの克服には、中退者が含まれているとは言い難い。同様の指摘は西村（2010：90）にも見られ「全体から見れば少数だとしても、雇用不安に直面する若者の一部学校教育の外側にいることも、もう少し視野に入れたほうが良いと考えられる」と警鐘を鳴らしている。

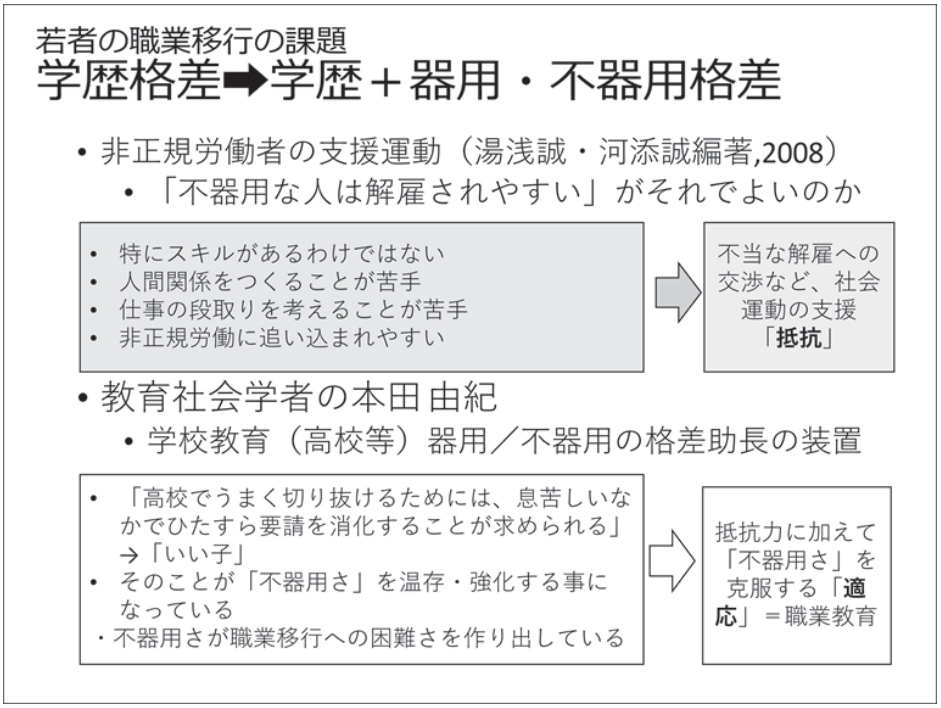

図1　不器用を巡る抵抗と適応の関係
出典：本田（2009）、湯浅誠・河添誠（2008）を参照し筆者作成

表４　高校中退者の職業移行

		正社員定着	非典型一貫	他形態から正社員	自営家業
男性	高校中退（21）	0.0	23.8	38.1	14.1
	高卒（121）	16.5	16.5	20.7	7.4
女性	高校中退（25）	0.0	64.0	16.0	12.0
	高卒（121）	12.3	32.2	11.6	5.5

出典：第４回若者のワークスタイル調査（2016）

河添や本田の主張する若者の職業移行をまとめると、①従来は学歴によって決まっていると考えられてきたが、就労条件が厳しくなった現在では、器用・不器用という格差が非正規雇用への職業移行を促している。②高校中退者は学校による職業教育を受けることが出来ず、部分的な器用さ（本田の

位置づける専門性）を修得する機会がなく、キャリア形成においては不器用な人々ということになる。しかし、第4回若者のワークスタイル調査（2016）によると、実際の高校中退者の職業移行では非典型一貫も確かに多いが、非正規等から正社員へ移行している者もかなりいることが確認できる（表4）。では、①や②の議論があるなかで、③何ゆえに高校中退者の中に非正規雇用から正社員（男38.1%, 女16.0%）や自営等（男14.1%, 女12.0%）になることが出来る人がかなりの割合いるのであろうか。これら①から③を考えていくと、キャリア形成における不器用さの正体が分っていくのではないだろうか。そこで、本稿では限られた事例ではあるものの中退者への聞き取りを通じて退学後の職業選択が実際にはどのように行われてきたか調査分析を行う。

3．調査の概要と結果

3-1　調査方法と調査地選定の理由

一般的には高校教育を離れたあと、安定した仕事に就くことが難しい若者は大きく二つに分類できると考えられる（表5）。ひとつは、本人や家庭の諸事情等で不利益が積み重なり、就労せず職業訓練も受けていない若者たちである。ここには障害や個人が抱える課題や生活歴等の問題も関係しており、高校中退者も含まれると考えられる。ふたつは、新規学卒時にスムーズに就労に移行できず、高校卒業資格は持っているものの特別な資格や技能を持っておらず、安定した雇用を得ることは出来ず、仕事、失業などを頻繁に繰り返す若者である。

表5　高校教育を離脱後の就労困難な若者の2分類

No.	高卒資格	学校キャリア教育	内容
1	×	×	職業訓練×、障害、家庭事情、個人の課題など
2	○	○	新規学卒就労▲、特別な技能×、離転職繰り返す▲

本稿では特に前者（No.1）の高校中退者における職業選択に着目をした。だが、退学した直後は高校生活自体に否定的であり追跡的な調査には一定の難しさがあると考えられる。そこで本稿では筆者自身が実践活動を通じて構築した交流網を用いて、追跡的に多様な聞き取りを実施することが可能となる西日本のX県に住む若者を調査の対象とした。調査は各対象者に対して聞き取りを行う形で実施し、分析手法としてはライフヒストリー分析を用いた。聞き取りは主に対象者の自宅や職場で実施した。対象者の特定を回避するために、出年表記とし詳細は伏せてある。一回の聞き取りは2時間程で実施し、音声の録音は行っていない。対象者の長期出張などもあり、調査は2019年4月から2021年8月までの時間を要した。特に事例Aとは関係性を築く難しさもあり、受け入れてくれるまで時間がかかった。また、倫理的配慮として調査の目的や、何のために話を聞くのか、得られたデータが何に使われるのかなど、筆者自身の立場も含め調査対象者の納得と同意が得られるまで繰り返し説明を行った。文章にしたものは内容に差異が無いかを直接確認してもらい、論文への使用承諾を得ている。今回の対象者はいずれも男性であるが、中退者の中には女性も存在しており分析の対象にするべきである。しかし、実際の聞き取りでは追跡的に関わることが難しかった。一例ではあるが、過去に女性の中退者を紹介してもらうが、聞き取り調査の場面に彼氏や夫が同席する傾向にある。繰り返し

会うことや時間帯の制約が多く調査への限界があった。女性中退者への聞き取りの紹介は別稿で行いたい。

今回、用いる事例は4名である（表6）。次節で詳述するが、いずれも中学校卒業後に高校へ進学する。進学する高校は専門科、普通科、県立、私立と混在している。共通なのは入学後何かしらの躓きや障壁によって、退学に及んだ生徒である。退学後は、生活するために人脈を頼りに金銭を得るために様々な体験をしている。個別の記述では（1）幼少期から中学卒業まで、（2）高校入学から退学まで、（3）高校中退後の生活と就労を巡って、といった3区分に分けて生活状況などを示した。

表6　本稿で用いる事例（調査対象者属性）

No.	名前	性別	生年	高校種別	学科	退学時学年	現在の職業
1	A	男	1987	私立全日	普通	1年	会社経営（足場鳶）
2	B	男	1995	県立全日	普通	3年	会社員（大手製鉄所）
3	C	男	1992	県立全日	専門	3年	会社経営（内装関係）
4	D	男	1991	県立全日	専門	1年	会社経営（不動産）

各事例の概要と退学直後の様子について簡単に記すとNo.1のAは、私立の全日制高校へ専願入試で進学する。勉強嫌いで学校には友達に会いに行くことに価値を置いていた。派手な振る舞いに教員から目をつけられており、入学2ヶ月後の6月に教員と喧嘩をして退学処分となり、退学後は姉の交際相手の紹介で鳶職に入る。No.2のBは県内でも比較的上位である進学校へ入学する。幼少期から兄と比較されがちであった。なんとなく高校3年まで通っていた。その後夏休みの補習講義を巡って教員との言い合いや家庭内での不和もあり9月末で退学をする。退学直後は日雇いの仕事を転々とするも馴染めなかったが、露店のバイトが相性良く長期的に働くことになる。No.3のCは専門科に進学し高校生活に適応していた。だが、高校3年の夏休みに友人と触法行為をして仲間をかばい8月末に退学をする。退学直後は都会を求めアルバイトを転々とする。No.4のDは自由に遊びまわる兄達を見ていたので最低でも高校に行く必要性を感じて、専門科へ進学するも入学して2ヶ月後の6月に喫煙を巡って学校と対立して退学することになる。退学直後は建設業への派遣などを時折しながら生活をするも、専門職を目指し不動産業に関わるようになる。

3-2　調査結果

3-2-1　Aの事例（No.1）

（1）幼少期から中学卒業まで

Aは、X県の東端の港町で幼少期を過ごす。両親は離婚しており父親に育てられる。父親は自営業で冷機会社を営んでおり金銭的には余裕があった。姉、弟と一緒に生活をしており、父親は自宅にあまり戻ってこなかった。父親は7回再婚しており他にも複数家があり姉が中心となって兄弟らの世話をしていた。ただ地域との関係性は良好で近隣の大人が食事などの手助けを頻繁に行っていた。Aは小学校の時には大きな問題を起こすことなく多くの友達と遊んでいた。変化が起きるのはAが中学生になった頃にある。姉の友人らが連夜自宅に集まるようになり、複数の男女が出入りし煙草やシンナーなどの遊び方を覚えることとなった。ただ、シンナーに対しては妙な怖さがあったので積極的

には使用しなかった。中学卒業する時の進路は、点数の問題もあったので私立を専願受験することで入学ができるようになった。父親に対しては特に進路の相談は行わず、周囲の友人らが高校への進学をしている様子を見て、何となく進学をしてみたという状況であった。

(2) 高校入学から退学まで

A が進学した高校は指導困難高校と位置付けられ、県内の問題を抱える生徒を多く受け入れてきた実績がある。A は自宅から JR で 1 時間ほど費やし登校していた。高校では、昔から知っている友人に加え新たな交流網も広がり充実していた。しかし、授業自体はアルファベットを 1 時間かけてなぞるだけや、英語の歌を聴いたりするだけの退屈な授業が主であった。学習に対する興味や面白さも見いだせず、退屈な日々であったが、高校に入学して同じ学校の彼女もできたこともあり毎日通学だけはしていた。退学の決め手となったのは、彼女が生徒指導の教員からスカート丈を巡って、嫌がらせを受けている場面を見て、「守らないといけない」と考え教員を殴ったことにある。結果的には暴力行為ということで退学処分となった。高校へ入学して 2 ヶ月後である 6 月に学校を辞めることとなる。退学したことに後悔はなく友人とは学校に行かなくても関われるので高校へ通い続ける必要もなかった。

(3) 高校中退後の生活と就労を巡って

高校中退後は自由なことをしたかったので金が必要であった。チマチマした仕事でなく単価の良い仕事を希望した。姉の交際相手の紹介で足場鳶の会社に就職した。就職といっても健康保険や正式な雇用契約書がある訳でもなく、「日当なんぼ」の世界であった。鳶の会社には恐ろしい人達が多くいたが馴染みの先輩も在籍していたので抵抗感はなかった。主には県外の現場へ応援と称した出張であった。九州の各県で工期が終えれば移動していくような生活を続けた。毎日、仕事が終わると出張先にある繁華街に出向き女性と話をしに行くのが楽しみであった。18 歳の時に徳島県の出張先で出会ったスナックの女性と結婚をして子供も生まれることになった。次第に地元 X 県で生活したいと思うようになった。そこでハローワークに仕事を探しに行くも、どれも給料が安く窓口の職員は事務的で話が進まなかった。結婚したから出張を中心とした生活はしたくなかったので求職するも条件に見合うものはなかった。同じ時期に姉も交際相手と結婚しており、金の話になり、義理の兄から「やくざは儲かるぞ」と勧められた（義理兄は既に組織加入）。仕事もなかったこともあり組織へ加入することにした[9)]。組織に属してからは今までに無い不思議な力を身に着けた感覚があった。周囲からトラブル事の相談などが舞い込むようになり、関係企業への煙草の販売や、飲食店へのおしぼりや、絵のリースなどを行い一定程度の収入があった。より大きなシノギ（仕事）をするために偽ブランドを飲食店のホステスや地元の暴走族などに販売していたが、思うような増収には至らなかった。自分自身の身なりを意識する必要や、想像以上に付き合いを大切にする体質であり、頼母子講などの支出は負担であるが、安めを見せるわけにもいかず、人夫貸を中心とした会社を設立し増収を図った。

人夫をする為の人材は、これまでの現場で知り合った交流網を活用して確保した。周囲からは「引き抜き」と言われながらも正面から文句を言われなかった。初めのうちは関係会社から仕事を受けていたが、専門的な作業ができる訳でもなく次第に仕事が減少していった。ピンハネが出来ないことで収入に直結するので現場に出て仕事を教え込む必要が生じた。現場に一緒に出て初めて感じたのが従業員は自分を頼ってきているので生活を安定させる必要があると思った。将来性も何もない会社についてきてくれるのは何故だろうかと自分でも不思議に思い、後に組織を離脱し会社一本で生きていこ

うと考え組織を離脱した。組織を辞めたのは30歳、一変したのは他の土建会社が正面から文句を言ってくるようになった。ある程度予想はしていたものの正直ここまでとは思わなかった。グレー層の人たちとの関係性を絶つ願いも込めて社名も漢字からアルファベットに変えてイメージも払拭させた。現場は中学や高校の友人らの紹介で仕事が徐々に入るようになり、丁寧に従業員へ仕事を教え込み実直に行うことで周囲からも一定の評価を受けることが出来た。また、太陽光パネルの工事関係を中心としながら橋梁鳶や重量鳶といった大きな仕事も受けることが出来た。2ヶ月しか通っていない高校生活だったが、周囲の友人らも起業しており仲間内で大抵の仕事は出来る自負もある。最近の悩みは高い給料を求めて根性入れて仕事をしようとする若者が少なくなったことである。例え学校でやんちゃな事をしていても、自分の会社ならば職人として育てていく自信はあるけど、職人の卵すら居ない状況である。いつまでも自分が現場に出る訳にも行かず後継者の確保が最大の課題となっている。でも勉強も苦手で、ネクタイ締めて会社に行く様なのは苦手でも、体を動かして金になる仕事をしたい若者はどこかに必ずいる。

3-2-2　Bの事例（№2）

（1）幼少期から中学卒業まで

Bは、大手工場が隣接しあう工業地帯で育つ。両親共に小学校の教員で、3歳違いの兄と妹がいる。小学校の頃から週に4日、学習塾に通い成績は上位であった。中学に入学してからはテニス部に入り県大会でも2位になるほどの実力であった。中学になっても学習塾へ行き勉強中心の生活であった。卒業時の進路は、自分の意見よりも母親の意向が強く県内で一番の進学校一本で受験をした。受験した高校は両親の出身校で兄も通っており、他の選択肢はなかった。だが、実際の入試では合格することが出来ず、2次試験で県内では中程度の進学高校へ合格し入学した。母から受験失敗以降、軽蔑されるような扱いを受け、家庭での居心地は良くなかった。

（2）高校入学から退学まで

高校へ入学したが特別な目標もなく、毎日カレンダーを塗りつぶして時間が過ぎるのを待っていた。親との関係性も良くなかったので会話することも少なく、刺激を求めて友人らと一緒に自動二輪学校へ入校し中型自動二輪免許の取得を目指した。学校が終わったら、制服から目立たないジャージに着替え二輪学校に通う時間は至福の時間であった。また、他の高校に進学した友人らや年上の新たな先輩など交流の輪が広がっていることが実感できたことも嬉しかった。免許を取得したけれど高校では禁止されていたので、先生達にバレない様に周囲にいつも気配りをする生活をしていた。隠密行動が面白く高校には何とか継続して登校することができていた。退学の契機となったのが、3年の1学期のテストで欠点となり、夏季補習を担任から指示され、それに不満を投げかけたことにある。テストの点数は生徒間で見せ合っていたので、Bと同様の点数であるにも関わらず補講を受けなくて良いなど、扱いに差をつけたことに納得が出来なかったからである。同様の扱いを受けた生徒は数名いたが、学校では扱いにくい生徒が多かった。最初の頃は指示通り参加していたが「何の為に参加しているのか」と疑問が膨らみ教員と口論になった。同じような意見は友人からも聞いていたが、仲間を巻き込むわけにもいかないので自分ひとり不満を教員へ投げかけた。その後、母親を召喚され「課題を提出しないと卒業できない」と言われたが、母親も「好きなようにすれば」と関心もなかったこともあり、「これからは、勝手に生きてやる」と半ば投げやりではあるも高校3年の9月に退学をする。

(3) 高校中退後の生活と就労を巡って

中退後は、自宅にそのままいるのは居心地も悪いので、まずは住む所と働く場所の確保を急いだ。不動産屋に行ってみても「保証人が必要」「未成年は…」といった受け答えで話が進まない。行く場所が無いので困っていることを、かつての補習仲間が聞きつけて宿泊をさせてくれた。数人の仲間の家を順番に泊まり渡っていたが、友人家族らの表情が苦痛になり、深夜営業のファミリーレストランやファーストフードで過ごすことも多かった。仕事は、携帯電話から「明日○○人募集！日給 7,000 円！」といったスポット派遣のようなことをメインでした。しかし、交通費や税金などを引くと手元に残る金銭は 5,000 円程度にしかならず、その日を過ごしていくのが精一杯だった。また、スポット派遣の仕事は、指定された場所に集合して詳しい手順を教えてもらわないまま仕事が始まるので何をして良いか判断できないことが多かった。派遣先の職場から理不尽に怒られることも多く、奴隷のような感覚があって続かなかった。その後、少しでも金額が良い仕事を求めて、足場作業、塗装工など経験したが、既に 16 歳から働いている年下の方が現場では偉く「お前、高校 3 年で退学か？」「俺は、1 ヶ月で中退や！」と馬鹿にされることが多く人間関係でどれも続かなった。収入がなくて困っており、「何か仕事ないかな」と周囲の友人らに相談をしていたら、「短期で祭りの出店の手伝いをしないか」と声をかけられた。友人も一緒に手伝いに行っていたこともあり苦痛な時間ではなかった。また、夜の祭りは神秘的な印象もあり仕事をしている感覚よりも楽しい印象が強く、現金が沢山飛び交う光景も新鮮だった。また、1 回の手伝いで 20,000 円貰えることに驚き「また、声をかけてください」と自分からお願いした。その後も、頻繁に手伝いの声をかけて貰うようになった事と、露天商の人達と家族の様に関われたこともあって、主な仕事を露店商に移行していった。露店の仕事は隠語も多く、仲間だけの連帯感もあり楽しく自分から積極的に働いた[10]。最初はかき氷などの簡単な手伝いであったが、次第に数点の露店も任されるようになり、主に九州エリアを中心に祭事を追いかけ移動する生活をするようになった。私生活では 23 歳の時に、露店商をしていた時の馴染みの客と結婚をして子供を授かった。長い間疎遠だった両親とも出産を機会に徐々に交流をするようになり育児などの手助けをしてもらうようになった。妻の家が複雑で両親がいないことも実家の両親と妙に仲が良くなった原因かもしれない。最近、コロナの影響もあって祭事ごとが無くなって収入が減り転職をした。大好きな露店の仕事を辞めるのは悩んだけれど、高校時代の友人から「俺の会社で中途採用あるけど、受験しないか」と声をかけてもらった事もあってダメもとで受験してみた。受験した会社は地元では大手の製鉄会社で受験するには、関係者の署名による紹介がないと受験ができない。友人が署名してくれたが入社できるとは思えなかった。しかし、結果的には合格し、今は友人らと一緒の部署で働いている。収入面、将来性共に露天商の頃より良い反面、寂しい気持ちが強い。だが子どもの将来のことを考えると適切な決断だったと考えている。

3-2-3　C の事例（No. 3）

(1) 幼少期から中学卒業まで

C は、父親、母親、兄、弟の 5 人家族である。父親は石油製品などを扱う大手の工場に勤めていた。住んでいたのは会社の社宅で近隣の家庭は父親と仕事上関わる人たちばかりで家族ぐるみの付き合いが多かった。可愛がってもらう反面、何か悪戯すれば近所の大人から父親以上に怒られていた。自然な流れで社宅の年長児童に誘われ少年野球に加入した。中学では引き続き野球部に入るも、今までの

友達感覚で練習に参加すると先輩から許されることはなく、上下関係が嫌になって退部した。その後、社宅の友人は皆が部活に入っていたこともあって、遊ぶ友人がいなかった。暇で困っていた時に、中学で仲良くなった友人から体操部へ誘われて入部をした。体操部の顧問は非常に厳しく練習も大変だったが、中学2年になる頃には全国大会へ出場するまでになっていた。中学卒業するころには推薦の声もかけられたが、自宅から一番近い高校に進学した。

(2) 高校入学から退学まで

進学したのは機械科であったが、特段の興味があるわけでもないので何となく高校生活を過ごしていった。高校1年の夏休み前に、ボクシング部の顧問が中学時代に体操で全国大会へ連続出場していることを知り入部を勧めてきた。暇つぶしになればと考え入部をするも高校2年、3年と地区大会の出場に留まる。3年の夏の引退試合を終え、部員らと遊んでいる時に遊び半分でガチャガチャ[11]の機械を店外に持ち出したことが問題になり高校で大きな問題となってしまう。高校は一緒にいた生徒全員に連帯責任があり、店側に対しても謝罪の会をすると言っていたが、Cが「一人でやった」と訴え退学することで話を終えた。Cが他の部員らの身代わりになった背景としては、話が面倒だったこともあったが、部活を終えて目的も無く高校へ通うことが負担であったことや、漠然と早く都会に出てみたい気持ちが強かったことにある。Cは高校3年の8月末に退学をした。

(3) 高校中退後の生活と就労を巡って

退学後は、手持ちの10万円を持って大阪へ向かった。住む所は事前に調べていた簡易宿を主に利用していた。都会的な仕事をしてみたいと考え、梅田にある洋服屋にアルバイトで雇用してもらった。履歴書や本人確認などの細かい手続きはなく時給1,200円と高く半年ほど働いた。辞めたのは、毎月それなりに収入はあるが、店の洋服を半強制的に購入させられてしまうので実際に残る金額が少なかったことにある。最初は、自分で古着などを扱う店をやってみたいと考えたが、金も貯金できず、多額の開業資金が必要と知って諦めた。仕事を選ばなければ、何とかなると思い探してはみたものの住所が定まっていなかったので面接にすら進めなかった。唯一、日雇いの仕事は細かいことを聞かれないので、スポット的に働いていたけど日々の生活を保つことで精一杯だった。その後、地元の友人が就職で大阪に来ることになって、頻繁に遊ぶうちに気が付いたら友人のアパートに住みついていた。気持ち的にも余裕が出来て週末は友人と飲みに行き女の子に声をかけ楽しんでいた。

ある時、堺から来ていた看護学生と仲良くなることになって交際をするようになる。その後、彼女が看護学校を卒業する年に妊娠をした。彼女は出産したいと考えているも看護学校を退学する必要があるため悩んでいた。自分が大切な彼女と生まれてくる子供の為にできることは安定した仕事を探すことだった。何社か求人へ応募するも不採用の連続が続き逃げたい気持ちが高まった。だが、洋服屋時代のお客さんと飲みに行っている時に、自分の状況を愚痴ると、「じゃぁ、うちで働くか」と誘われて内装業の仕事に就いた。仕事は想像以上にきつくて夏場の室内作業は意識がなくなることもあった。体力には自信があったのと、彼女と子供の為にも頑張らなければという気持ちから真剣に働いていたら、信頼と評価を受け現場を任されるようになった。彼女も看護学校を退学し、友人のアパートにて3人で生活をしていたが、出産を機会に自分でアパートを借りた。保証人が必要だったけど同居していた友人がなってくれた。大阪の九条でアパートを借り、子供も生まれて金銭的余裕は無いけど充実した毎日だった。しかし、子供が大きくなるに伴って、子育ての大変さを感じ自然のある環境で育ててあげたい気持ちが強くなり地元のX県に戻りたいと思うようになった。住む所は親と同居で

きても、仕事には正直不安があり、かつての様に就職試験を受けても不合格が続きそうな思いが強かった。内装の親方に相談すると、「内装屋を自営してみたらどうか」と言われるも仕事が確保できる自信が無く見送った。

変化があったのは、かつて同居していた友人が帰省するときに一緒に戻った時にある。友人の実家が古くなっていたので、壁紙の張替えをしてあげた。友人宅で地元の仲間と飲んでいると「これ誰が張り替えた」との話題になり、材料代程度で数人の家の張替えをしてあげた。友人の一人が住宅メーカーに勤めていて「これだけの腕前なら地元でやっていけるぞ」と紹介してくれる事になった。最初のうちは大阪から出張して働きにきていたが、現場も多くなり収入の面でも何とか目途がつきそうなので、子供が小学校に入学する前に地元に戻り自営した。地元で驚いたのは、大阪では通用しない技術でもお金を得ている職人が多く、見えない工程を省く慣習が横行していたことだ。職人仲間から「どうせ見えない場所やん」「早くした方が効率的」と言われるが、紹介してくれた友人の顔もあるので省略せず施工している。素人には気づかれないが信用を失うことが何よりも怖く裏切れない気持ちの方が強い。

3-2-4　D の事例（№ 4）

（1）幼少期から中学卒業まで

D は X 県の大規模工場が立ち並ぶ地域で育つ。父親はかつて工場に勤務していたが、仕事中に大きなケガをしたことで働くことが出来ず母親がパートをして収入を得ていた。父親とは仲が悪く家族で何かをした経験はない。D には 2 人の兄がいる。2 人は素行が悪いと評判があり、界隈では有名な存在で年長者らとの交流も盛んであった。D 自身は兄らの生き方に嫌悪感もあったけど恩恵も受けていたので複雑な思いであった。中学に入学したら、周囲からの特別な扱いは顕著になり中学校の教員からも腫物を触るように扱われていた。部活では、友人に誘われサッカー部に入部したが、それほど真剣には取り組んでいなかった。D が中学 3 年になった頃、2 人の兄は既に卒業していて土木関係の仕事に就き夜はバイクに乗って遊びまわっていた。D 自身もバイクに興味があり、後部席に乗せてもらうことも多かった。だが、その後 2 人の兄は触法性の高い非行を積み重ね少年院へ入る。その様子を見た D は進路について考え始めた。「兄の様にはなりたくない、その為には最低でも高校に進学する必要がある」と考えて高校受験を意識するようになった。しかし合格圏内の高校がなく隣市にある D の学力で入れる県立福祉科の高校を受験し合格した。理由は手に職をつけるためであった。

（2）高校入学から退学まで

D が入学した高校は生徒に対しては厳しい管理型の指導であった。これまで、中学では教員が機嫌取りのように関わってきていた反動からか、D は徐々に反感を抱き横柄な態度で教員へ反発するようになる。入学 2 ヶ月後に友人らとの喫煙が発覚し停学処分になる。高校教員から「他にも誰か一緒に喫煙をしていたな。白状しろ」と言われたが、友人を売る感じも嫌で退学を決意する。

（3）高校中退後の生活と就労を巡って

中退後は自宅にいることが多くなり働かない父から「仕事をしろ」と言われ衝突が続いた。その後、中学から交際していた彼女の実家に転がり込み生活をするようになった。生活費を得るため、兄の友人から紹介してもらい建設現場で派遣のアルバイトをするようになったが、仕事が無い日も続き不安定だった。あるとき彼女の父から「知人の仕事を手伝わないか」と誘われ不動産業に就く。不動産の

仕事は収入面では良かったが、競売関係の仕事が主となり、他の社員からは「中卒だから…」と揶揄され居心地は良くなかった。たが、彼女の実家に住んでいたこともあり仕事は続けた。ところが彼女が高校卒業後、福岡の専門学校に進学し実家を出ることとなった。別れを告げられて彼女の家にも居づらくなり家を出る。彼女の実家を出るタイミングで不動産の仕事も辞めた。その後、住む所は友人の宅を転々としながら再び日雇いの仕事をする事となる。日雇いをしていたころ派遣先である親会社（建設会社）のEと出会った。Eは地元の出身で2人の兄弟の事を知っており「お前、2人の弟か…」と私生活でも食事やドライブなど面倒をみてくれるようになった。一緒に遊んでいるうちに将来の不安など相談をするようになり「お前、宅健とれば！」と勧められるようになった。勉強に自信がなかったが、Eが親身になり働きながら通える夜間の資格学校を探してきた。そこで日雇いの仕事も辞め実務を学ぶために不動産屋で働きながら試験に挑戦することにした。この時は、昔の彼女の父親の紹介で雇ってもらった。試験は難しいが「周囲を見返したい」「将来大きな仕事をしたい」という気持ちが強く頑張った。その後、24歳3回目の受験で合格をした。宅建の免許を取得してからは、それまで賃貸の紹介しかできなかったのが売買仲介を出来るようになり、仕事の幅も収入も増えた。また、これまで「中卒だろっ」と色眼鏡で見られていた感じがする周囲から「免許保持者」と正当な評価を受けることができた。大学卒業している人でも試験に合格することは難しく自信にも繋がった。途中「正社員にならないか」と数社の不動産会社から誘いを受けるが、正社員の道は選ばず28歳で独立開業をした。「仕事があるか…」といった不安もあったが、Eや2人の兄弟、地元の友人らの紹介で仕事は予想以上に多く、新たに従業員の雇用も検討している。

4．知見と考察

本稿では、高校中退者の語りを手掛かりとして退学後の職業選択が実際にはどのように行われてきたかを紹介してきた。A、B、C、Dの4人の事例から見出された知見と考察を以下に整理したい。

4-1　対象者の抱える不器用さとは

先ず、各事例の高校中退までの生活史から、対象者がどのような不器用さを抱え、それがどのように高校中退につながったのかを整理していきたい。Aは家庭では、姉の友人らを中心とした年上と交流もあり、非行文化との接点も強かった。だが、中学卒業時には、漠然とながらも高校へ進学し、交流網の広がりもでき高校には通えていた。しかし、目の前で困る彼女を守りたいと考えた結果、後先考えず暴力を振るい退学に及ぶ。次に、Bは家庭で兄と比較されることを不快に感じながらも、高校3年迄在籍している。進学校でありながら、自動二輪の免許を取得し交流も多く仲間も増えていく。夏季補習では同様の不満を抱く生徒がいることを知りながらも「友人を巻き込みたくない」といった気持ちから、一人教員へ反抗をして結果的には退学となる。Cも同じく高校3年迄在籍をしている。高校では部活を軸に友人が多くいた。一時の過ちで仲間らと触法行為するも他の者を守って一人で責任を負い退学をする。最後に、Dは触法性の高い兄とは違い専門性を学ぼうとして進学するも、高校教員との関係性が悪かった。喫煙が発覚された時には、友人らの喫煙を教員へ報告することなく一人で責任をとり自主退学となる。いずれの事例も、友人や彼女といった大切な存在を守るために、決して合理的ではない退学という選択を行っており、極めて不器用であるといえる。

しかしながら、対象者の抱える不器用さは中退後のキャリア形成を追うなかで、就労に至る上では、むしろプラスの働きを見せていた。例えば、A は反社会的な組織に加わるものの、周囲の仲間からの紹介で仕事を確保しながら相互に協力して起業をしている。B は、友人の声掛けで天職ともいえる露店の仕事に関わるようになる。しかし、将来のことを考え悩んでいる時に、別の友人から紹介を受け大手の製鉄会社へ就職している。C は、当てもなく都会を目指して関西で就職するが結婚し地元に戻る時に仕事の心配をしなくて良かったのは、仲間による支えが大きいと考えられる。D は当初興味のない不動産業へ周囲の紹介で関わることになる。だが、免許取得後は地元の友人らと関りから開業をすることができた。A、B、C、D いずれも中退時には不器用と考えられてきた振る舞いが就労への移行においてはプラスの働きを見せている。

4-2　キャリア形成における不器用さとは

不器用さについて河添は次のように考えている。「人間関係をつくるのが得意な方ではなく、積極的に自分から主張するほうでもない。周囲の人とまったく関りをもたないというわけでもないのだが、関りのもち方がやや一方的であり、周囲は彼を『ちょっと変わった人』と見ている。このような不器用さは、出身家庭の社会階層や親子関係、そして成長してくる過程での経験が反映される」（湯浅・河添編 2008：20）と考えている。このような不器用さは不当な解雇に遭遇しやすいため、抵抗する力が必要と主張している。しかし、本田（2009）は抵抗する力だけでは限界があるので、適応する力が必要となり、不器用であっても部分的な器用さ（専門性）を学校における職業教育によって学ぶ必要があると考えている。そして、専門性により不器用さをカバーし、気がつくとかなりの器用さも身についているというプロセスが望ましいと主張している。

だが、本稿の対象者はいずれも中学、高校時代は優秀とはいえず学校に適応できているとは言い難い。また、友人や彼女を守って退学するという不器用さが見られる。各対象者は退学直後、自分に自信が持てず日雇いや派遣など、とりあえず働ける仕事を入口としている。仕事を確保した一方では、仕事の段取りや人間関係での悩みを抱え早期の離脱を選択するといった不安定な状況にある。職場にも馴染みにくいという点や組織の一員として生きていくということを考えたら、確かに河添の指摘する不器用さが確認できる。しかしながら、対象者の不器用さは A、B、C、D を支える仲間の間では何らマイナスの要因にはなっていない。このような点を踏まえると不器用さには 2 つの側面があるのではないかと筆者は考えている。

1 つ目は学校教育から離脱、会社組織になじめない「不器用さ」である。各対象者は学校教育から離脱し、河添の指摘する違法な雇用等へ「抵抗する力」を身につけることもなかった。また、本田の指摘する「専門性＝限定的な器用さ」を退学することで学ぶことが出来ず不器用さを補完できなかった。2 つ目は仲間関係で信頼を築く「不器用さ」である。各対象者から退学直後は「その時は、そのようにするしかなかった。そのようにしか出来なかった」と仲間を守る選択への後悔は聞かれなかった。調査結果から読み取れることは、アソシエーションの中では排除の理由となる「不器用さ」については仲間関係などコミュニティの中できちんと生きていく上ではむしろプラスになることさえもあるのが判明した。すなわちコミュニティできちんと生きていく不器用さは職場というアソシエーションへの適応能力を高める職業教育（キャリア教育）の限界を示しているのではないかとも考えることができる。

4-3 中退者の就労支援と課題

調査事例からは、中退後に就労先を選択する過程で必要な課題として 4 点が見いだされた。1 つは居場所の提供である。これは、退学直後に相談する相手がなく次のステップへ安心して進めないことからも重要な点であると考えられる。2 つ目は、就労のためのスキルを身に着けておらず職業選択に制限が見られる点である。3 つ目は、中退をした後にいずれの事例も公的なサポートを受ける入口にすら辿り着けなかったことである。4 つ目は事例 A、B、C のように結婚や出産によって新たな就労先を探そうにも、中退して年数も経過していることもあり友人以外の相談先は敷居が高い現状にあることである。これら 4 点の課題に対して対応が期待されるものに地域若者サポートステーション（以下、サポステ）事業などがあるものの、実際には対応の難しさがあるようである。例えば金本佑太（2020）はサポステの功績は評価しながらも、主には若者の職場体験や就労の機会という出口論が主な論点になっており、困難を抱える若者を支援機関につなぐ入口論が重要であるも十分な蓄積がなく解明の必要があると指摘している。特に中退者はどの支援機関とも接点を持たず、就労困難が長期化することを防ぐためにも、教育機関を中退する段階でサポステにつなぐ必要性がある。入口問題に焦点を当てた調査からは地域に根差した経験やネットワークを持つ人物の媒介により連携が有効に機能していることを知ることができる。これに対し本稿の事例からは、公的機関の支援でなくとも個人の持つ仲間などの交流網によって就労問題という壁を乗り越えてきていることが明らかとなった。

4-4 新たな取り組みにむけて

本稿では、若者の就労を巡る例として、中退者の職業選択を取り上げ高校への入学から中退後の職業選択のプロセスをライフヒストリー分析の手法により明らかにすることを目的とした。その結果中退者の就労を可能とするためには各自が抱える課題や家庭をも含む背景と向き合いながら支える周囲の仲間を中心とした支援者の手助けが有効であることが明らかとなった。中退をすることで学校教育でのキャリア教育や支援網から抜け落ちていく危険性がある一方で、信頼を軸としながら、愚直に疑いなく挑戦することで、自分の強みを掴みとっていた。今回の事例では、主に仲間集団が就労への移行を担っていたが、今後は政策的にも現実的な支援の方法を構築していく必要がある。

本稿では中退者のキャリア形成に関して分析してきたが、古典的名著として一冊の本が思い浮かぶ。『ハマータウンの野郎ども』（1977）では 1985 年に訳本が出て以来、主に教育社会学者が検討を重ねてきた。学校制度への反抗という労働者文化を内面化した若者たちは、学校への反抗によって自ら中産階級への階層移動を放棄し、労働者階級を再生産していく、という逆説を明らかにした、と教育社会学者たちは理解してきた。この本の原著には不器用さ（awkward）という言葉がしばしば登場する。英語にはもうひとつ日本語の不器用を意味する clumsy という単語もあり、こちらは無能というネガティブな意味である。ただし、ウイリスは一切使用していない。かつて、高倉健が CM で語った「不器用な男ですから」は “I'm an awkward guy.” と BBC では紹介された。それはもちろん、ポジティブな意味をこめてである。そうすると、日本の教育社会学者によるこの本の理解には、コミュニティでのきちんとした生き方（awkward）への見落としがあるのではないだろうか。本研究の知見は、限られた事例ではあるものの、実態研究が多くない現状において中退者への就労支援策の検討にとって重要な示唆を含むものであると考えられる。

【注】

1）career の語源はラテン語で車の通る道のこと。車が通った後に出来る轍で、何かした結果として残るものを意味する。医師、法律家、聖職者など伝統的な専門職らの職業遍歴を指し、職業経歴の意味合いが強かった。ビジネスの世界では優秀な人材層を指し、キャリアという言葉は時代と共に広がりを見せた。心理学分野では『職業の選択（Choosing a Vocation）』1909,Parsons. にて、心理特性論的な立ち位置から職業指導や職業選択の分野に理論的な根拠を与えた。職業指導の分野では、人的資源の活用（キャリアガイダンス）、人間としての発達（キャリアカウンセリング）の２つの立場で研究が進められた。学校教育では、職業教育、職業指導、キャリア教育へと発展してきた。かつて米国社会ではドロップアウト、失業、非行、職業的未成熟などの解決のための研究として用いられてきた。近年では生涯にわたる生き方をライフキャリアとして捉える考え方も現れ、キャリアを生涯出会う仕事、働くことの経験の総体を指し、職務経験や職務上の役割だけでなく、様々な人生の上での役割、行動パターンをも含むようになってきた。

2）若年者雇用実態調査は、厚生労働省が事業所における若年労働者の雇用状況、若年労働者の就業に関する意識など若年者の雇用実態について把握することを目的とした調査。5 人以上の常用労働者を雇用する事業所約 17,000 カ所と、そこで働く若年労働者（15 ～ 34 歳の労働者）約 30,000 人を対象として 2018 年 10 月 1 日現在の状況について調査を実施したもの。有効回答率は事業所調査で 55.3%、個人調査で 66.4%。

3）離職に関して厚生労働省では雇用保険データに基づく入職 3 年以内での離職率を公表している。若者の早期離職は、7・5・3 問題（中学新卒者の 7 割、高校新卒者の 5 割、大学新卒者の 3 割が 3 年以内に離職する）とも称され、新規学卒採用が広く行われている我が国においては、社会的関心を集めてきた問題でもある。

4）そのほかの期間では、1 年以上～ 10 年未満では「労働時間・休日・休暇の条件がよくなかった」と回答した割合が最も高い。10 年以上では「結婚、子育てのため」と回答した割合が最も高い。

5）若年者雇用対策の現状等について（https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000548637.pdf）2021 年 11 月 2 日取得.

6）社会学者の渡辺深（2014:9-10）はアメリカの社会学者グラノヴェッターの実施した米国男性ホワイトカラー労働者調査が今日でも職業選択の参考となるとしている。同調査では、仕事を見つける方法を三つに分類している。①フォーマルな方法、②人的つながり、③そして直接の申込みである 。国内の古い著書として大野（1969）が『転職の社会学』のなかで就労への媒介ルートとして①人縁と広告、②人材斡旋機関、があると示す。面白いのは定年退職者の再就職の内訳である。紹介経路では、退職前の会社（36%）、知人等の紹介（46%）、後は、新聞・ビラなどで探すとあり、主に人縁により再就職が可能となっている。

7）若者支援とキャリア形成―課題を抱えた層へのアプローチ（2011）（https://www.jil.go.jp/kokunai/blt/backnumber/2011/10/002-021.pdf）2021 年 10 月 20 日取得.

8）若者のワークスタイル調査 2005 年、2001 年を比較したものである。その中で、正社員定着率、非典型一貫を抜粋したもの。なお、若者のワークスタイル調査は 19－29 歳の若者から 2,000 人抽出（エリアサンプリング）にて実施。

9）後に姉と義理兄は離婚をする。しかし、Aと義理兄の関係は長らく継続することとなる。また、弟は高校に進学せず、Aと同じく足場鳶の会社で出張を主にして就労していたが、出張先で傷害事件を起こし少年院へ入院する。退院後は、少年院で取得した資格を活かした就労をしようとするも難しくAと同じく盃を受け組織へ加入する。後に生活困難となり兄弟共に30歳で脱会。

10）隠語として、ネタモト（卸問屋）、ハボク（植木屋）、アカタン（金魚）、ロハ（無料）などを筆者に対し紹介してくれた。隠語は所属する露天商により随分と表現の違いがあるとのこと。

11）ガシャポン、ガチャ、カプセルトイ色々な名称がある。ガチャガチャの由来に関しては、硬貨をカプセル自販機に投入、ハンドルを「ガチャガチャ」と回すその様が由来と言われている。名称に関して、厳密には各玩具メーカーによって登録商標をされているものが多くあり、ガチャポン/ガチャンコ/ガチャ（タカラトミーアーツ）、ガシャポン（BANDAI）など。他にも地域や年代を考慮すると無数の様々な呼び方がある。（https://gashapon.jp/）2021年11月12日取得.

【文献】

青砥恭，2009,『ドキュメント高校中退――いま、貧困がうまれる場所』筑摩書房.

大野力，1969,『転職の社会学』日本実業出版社.

片山悠樹，2018,「中退者の不安定な移行――都市／地方の違いに注目して」『愛知教育大学研究報告』教育科学編，67（1）：39-47.

金本佑太，2020,「若者就労支援における地域の関係機関との連携――地域若者サポートステーション事業の事例から」『現代の社会病理』日本社会病理学会編，35：115-130.

吉川徹，2018,『日本の分断――切り離される非大卒若者たち』光文社.

熊沢誠，2006,『若者が働くとき――使い捨ても燃えつきもせず』ミネルヴァ書房.

玄田有史，2001,『仕事のなかの曖昧な不安――揺れる若者の現在』中央公論新社.

厚生労働省，2018a,『新規学卒者の離職状況』（2021年10月4日取得，https://www.mhlw.go.jp/stf/seisakunitsuite/bunya/0000137940.html）.

――― 2018b,『平成30年若年者雇用実態調査』（2021年10月4日取得，https://www.mhlw.go.jp/toukei/list/4-21.html）.

――― 2018c,『若年者雇用対策の現状等について』（2021年10月15日取得，https://www.mhlw.go.jp/content/11801000/000548637.pdf）.

国立教育政策研究所，2017,『高校中退者調査報告書――中退者と登校者との比較から見えてきたもの』生徒指導・進路指導研究センター.

小杉礼子，2007,「学校から職業への移行の変容」堀有喜衣編『フリーターに滞留する若者たち』勁草書房，31-99.

――― 2010,『若者と初期キャリア――「非典型」からの出発のために』勁草書房.

――― 2017,「日本における近年の若者の就業問題：新卒就職システムの光と影」（2021年11月3日取得，https://www.jil.go.jp/foreign/report/2018/pdf/18-03_04.pdf）.

総務省，2021,『労働力調査』（2021年10月20日取得，https://www.stat.go.jp/data/roudou/sokuhou/tsuki/index.html）.

筒井美紀・桜井純理・本田由紀編，2014，『就労支援を問い直す――自治体地域の取り組み』勁草書房.

内閣府，2021，『子供・若者白書』.

西田芳正，2007，書評 堀有喜衣［編］，『フリーターに滞留する若者たち』『教育社会学研究』81：120–122.

西村幸満，2010，読書ノート 本田由紀著，『教育の職業的意義――若者，学校，社会をつなぐ』『日本労働研究雑誌』598：89–92.

日本キャリア教育学会，2020，『新版 キャリア教育概説』東洋館出版社.

日本労働研究機構，2001，「大都市の若者の就業行動と意識――広がるフリーター経験と共感」『調査研究報告書』146.（労働政策研究・研修機構　調査研究成果詳細データベース，2021年5月8日取得，https://db.jil.go.jp/db/seika/2001/E2001120016.html）.

堀有喜衣・小杉礼子編，2013，「高校における就職指導と未就職卒業者支援の今」『高校・大学の未就職者への支援』勁草書房，19–50.

本田由紀，2009，『教育の職業的意義――若者、学校、社会をつなぐ』筑摩書房.

BBCNEWS，2014，“*Veteran Japanese actor Ken Takakura dies at 83*”（2021年5月18日取得，https://www.bbc.com/news/world-asia-30092460）.

Paul E, Willis, 1977, *Learning to Labor――How working class kids get working class jobs, Routledge.*（＝1996［1985］熊沢誠・山田潤訳『ハマータウンの野郎ども――学校への反抗労働への順応』筑摩書房.）

Frank Parsons, 1909, *Choosing a vocation.*（2021年10月4日取得，https://ia902608.us.archive.org/29/items/choosingvocation00parsuoft/choosingvocation00parsuoft.pdf）.

Mark Granovetter，1995，*Getting a job：A Study of Contacts and Careers，Second Edition，The University of Chicago Press.*（＝1998渡辺深訳『転職――ネットワークとキャリアの研究』ミネルヴァ書房.）

宮本みち子，2015，「若者の移行期政策と社会学の可能性――『フリーター』『ニート』から「社会的排除へ」『社会学評論』66（2）：204–223.

山田昌弘，1999，『パラサイト・シングルの時代』筑摩書房.

山田清機，2019，『不器用な人生』朝日新聞出版.

労働政策研究・研修機構，2006，「大都市の若者の就業行動と移行過程――包括的な移行支援にむけて」『労働政策研究報告書』72.

――――― 2017，「大都市の若者の就業行動と意識の分化――第4回若者のワークスタイル調査から」『労働政策研究報告書』199.

湯浅誠・川添誠編，2008，『「いきづらさ」の臨界――〝溜め〟のある社会へ』旬報社.

How to Choose occupations by the Senior High School Dropout
— About “Clumsy” in Career Formation —

MISHIRO, Yosuke

As young people grow up, they face many challenges. In particular, choosing a profession is an important issue. However, high school dropouts are not eligible for support. So what challenges do high school dropouts face in their career choices? Until now, attention has not been paid to what kind of career choices high school dropouts make. That's because the problem of dropouts in high school was considered to be an internal problem. However, since the beginning of the 21st century, attention has been focused on the career choices of high school dropouts. The reason for this is that it became difficult for young people as a whole to choose their profession, and attention was focused on young people with non-regular employment. In particular, high school dropouts are attracting attention as a cause of non-regular employment. In this paper, we investigated how high school dropouts choose careers by life history analysis.